

六 花

り

っ

か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai
designed by masami

12月号

一



山田六甲

よろけつつ鴨の横切る磧かむらかな

餅を売る野良のら着ぎの娘むすめ菊きく日ひ和わり

蔦つた紅葉もみじ岩いのあわひに溢れ出づ

鳶とび睦むつみ合あひ日ひ輪りんへ冬ふゆ曇ぐもり

捨て瓦紅葉落葉に埋もれあり

人違ひしては待ちをり十三夜

日差しへと近づきゆけり蔦紅葉
雨退のきし歩道に灯ともる後の月
後の月映る硯すずりに墨を磨る
せせらぎの魚影まばらに秋時あきしぐれ雨
長き夜の寝酒にまぢる鱗うろこかな
寒風かんぷうの山頂の空研とぎゆけり
紅葉茶屋小さき座布団すず勧めらる
毛氈もうせんに紅葉散りけり滝見茶屋
水に立ち羽ばたかむとす暮の鴨

蓮の花

青楓雨の名残をきらめけり
あおかえで なごり
あかんぼの遠い泣き声夜の秋
蝉の声風に流れてきたりけり
なつしゅうとう
夏手套脱ぐや夕べの風流る
ためいき
溜息をつけぬ哀しみ水中花
すいちゅうか
寝乱れし浴衣のままに髪梳ける
す
白鷺の水面を打ちて飛び立てり
しらさぎ みなも
蓮の花日に透けながら重なりぬ
す
終戦忌水平線に消ゆる鳥
水かぶりながら水脱ぐ葡萄かな
ぬ
ぶどう

限りある身をいとほしみ薔薇仰ぐ 池崎つり子

仏前の夕張メロン匂ひけり

蝉しぐれ一斉に止む涼しさよ

畦道に一括りごと芋の茎

込み合ひて芋茎畑の長き畝

かぎりあるみをいとほしみばらあおぐ

季語＝薔薇(夏)

「いとほしみ」は「愛おしみ」のことで可愛く思ったり、ふびんに思うこと、大切にすること。「限りある」とは生命に限りがあることを省略付随させてある表現。いとほしんでいるのは我が身であり、花の命の短い薔薇のことでもある。いや、花の命の短さに、ふと我が身のことには思いが至ったのだ。「限りある命だからこそ大切にしよう」という気持ちで、読者にとつてもいとほしい作品溢れる作品。

稲の花

木内美保子

田の神はまるき石なり稲の花
 海の紺葉裏に透けて青蜜柑
 さらさらと野風が揺する青芒
 満月を砕いて汲みぬ長柄杓
 糸蜻蛉水際に細き身を反らす

芋の露

笹村 政子

芋の露こぼれて光残りけり
 印南野や畑一枚の芋嵐
 エプロンの端もて拭ふ露の縁
 赤とんぼモデルハウスに影流す
 補聴器を外して母の虫の夜

檀木集

限りある

池崎るり子

仏前の夕張メロン匂ひけり
蝉しぐれ一斉いっせいに止む涼しさよ
畦道ひとくくに一括りごと芋の茎
混み合ひて芋茎畑うなぎの長き畝
限りある身をいとほしみ薔薇ばら仰あおぐ

砂の上

三井孝子

波音や午睡ごすいの足は砂の上
空ばかり風は吹きをり赤とんぼ
くちづけも羽を休めず秋の蝶
薔薇の花暮れゆく村を見てをりぬ
寂しかり向日葵ひまわり切りし大きな空

秋色

延川五十昭

秋色しゅうしょくのきざして来たり百日紅さるすべり
蠓螂かまきりの影うつりたる障子かな
虫食ひの柿ついはめる鳥の声
太刀魚たちうおを焼く食堂の招き猫
蠓螂を眼鏡ずらしてながめけり

限りある身をいとほしみ薔薇仰ぐ

池崎るり子

このしみじみとした句を、今月は文句なしに夢風撰巻頭句に推薦した。詳細は夢風撰。

薔薇の花暮れゆく村を見てをりぬ

三井 孝子

薔薇の花が暮れてゆく村を見ているのではなく、薔薇を通して、自ら住む村が日暮れていく様子を見ている。見ていると言うより、夕暮れを感じているのである。夕暮れに人はそれぞれに思いをのせて一日の終わりに入る。

螻螂の影うつりたる障子かな

延川五十昭

カマキリの影が障子に映った。俳句が言えるのはここまでだ。これ以上説明しては、読者の味わう領域を侵してしまふ。即ち読者を信用していないことになる。カマキリの影は緑色か、枯れ色かなど読者が想像して味わう処を残しておかなければいけない。

あさがほやはなそれぞれに誕生日

いば 智也

我は魚投網の如き大火花

岩松 八重

大きな揚火花が開いたとき、自分はまるで投網（とまみ）の中に捕らわれた魚のように感じた、というのが如く俳句としては成功した。

台風の高き産声葉月尽

角田 信子

暁の高き産声葉月尽

K O K I A

掲句の様子は十月号編集後録に詳しく書いてあるので詠んで貰いたい。とても感動的な場面。

秋天へ高くはばたきゆける鶴

佐原 正子

武蔵野を花野となせる風吹けり

武田 美雪

（秋）風が吹いて花野になったというのが佳い。その風が今吹いている武蔵野の地に立って、秋の花野の景色を満喫している。

焼いかの匂ひにひかれ秋まつり

馬場美智子

秋祭りに出ている店の食べ物、とくに匂いを漂わせる食べ物に、焼きいか・焼きとうもろこしなどは代表格。それらの匂いは夏祭りや秋祭りの雰囲気在大いに盛り上げる。いか焼きの前をそうそう簡単に通り抜けられない経験は多くの人がしているところ。

朝市の艶よき茄子を糠漬けす

松下 幸恵

全身をつつむ蝉声雨後の路

松本文一郎

雨後の蝉の声は、雨が空中の汚れを雨が洗い流しているから普段よりも強く感じ、その上空気が澄みきっているから太陽の光線も同じく強烈で暑い。そこを詠んだ。

白シャツの下ろしたてなる匂ひかな

宮森 毅

静けさや厄日の朝の明けて来し

物江 昌子

屋上の私を包む月明り

わかやぎすずめ

屋上に月光が全身を包むように輝いている。月光は青く冷たい感じだが、どこか温みを帯びているのは「私を包む」と言つて、月明かりが私を包んで守ってくれているようだ、と詠んだところ。

鉢植の位置定まりて涼新た

平井 藩子

鉢植の位置を意図的に置いて定まらせたのか、自ずと定まったのか、判明しないが、夏の間の日当たりや、日蔭の具合を植物の種類によつて動かしていたのが、定まるころにはもう涼しくなつてきたというのがであろう。そこを「位置定まつて」と言つたところが面白い。

一畝の吼えてをりけり芋嵐

永田 勇

芋の葉に吹き付ける強い風が芋嵐だが、掲句の佳しさは「一畝の」にある。句の通り一畝の芋の葉がまるで獅子が吼えているようにつよく揺れ動いているのである。

完璧な構図に月の上りけり

田尻 勝子

、名月の上つてきた風景は絵画にしたら、きつとこれ以上の景色はあり得ないほど完璧な構図、と言いつつたのが佳い。読者はあれこれ想像を膨らます。

出荷場の選にもれぬし柿を剥く

山本ミツ子

出荷場の選に漏れたからといって、不味いわけではなく、少々歪か傷や汚れていどで生産家庭で食べるには一向に支障がない。現代流通機構の病的に完璧な商品売ろうとする姿勢の弊害は大きい。しかし贅沢に慣れた消費者の責任でもある。社会性俳句とは直接的に揶揄するのではなくこういう姿勢で詠むのがよい。俳句でも社会批判は詠めるということの証左。

生きることに疲れたる日よ芒囀む

横山 迪子

生きることに疲れた、とは多くの人々が一度は感じた事。そんなとき人は物を囀むことによつてストレスを和らげる方法を本能的に知っている。ススキの持つ大自然の匂いや味がアロマ効果を持っているからだ。

頑張れ！万年少女。(以下略)

六花集

山田六甲選

平居 滯子

鉢植の位置定まりて涼新りようあらた

朝顔のひと色となり咲き残る

葛くずの花危険水位の赤き帯

荒れ庭に賜物たまもののごと水引草みずひきそう

無口なる子が満月を告げに来る

わかやぎすずめ

永田 勇

月明り掻き消す雲の流れかな

雲間より月光差してきたりけり

屋上の私を包む月明り

満月をつかまん両手差し伸べる

あの人を想うため息夜長し

芋嵐いもあらし墨絵のやうな一軒家

芋嵐天地の境消しにけり

一畝ひとつねの吼ほえてをりけり芋嵐

秋雨や傘を一振りして入る

秋愁や夜明けの列車の音届く